

魯迅における醫學から文學への轉移

塩 谷 充 夫

魯迅の、一八八一年、浙江省の紹興に生れ、一九三六年、上海の陋巷に、その五十六歳の、波瀾に富んだ一生を終るまでの、決して永いとは云えない生涯の中での、彼の伝記上の重要な一つの事柄について考察してみたい。それは魯迅が、日本に留学し、後述する如く固い決意を以て、医学を修めるために、仙台の医学専門学校に入学したこと、及びそのようにして志した医学であったのに、中途にして之を廢して、文學に転じたこと、のその間の経緯である。

二

魯迅は前述の如く、一八八一年、浙江省の紹興に、周家の長男として生れた。彼の家は当時、彼の祖父が北京の中央政府の官吏として、相当の地位にあり、家にもいくらかの田地などがあつて、かなり富裕な家柄であつた。ところが魯迅が十三歳の時、そ

の祖父が或る事件のため、杭州の獄につながれることとなり、これを契機として、彼の家は急に没落し、更に十六歳の時、今まで病床にあつた父が、三十七歳という年で死んでから、家はますます困窮し、母が魯迅と二人の弟をかゝえて、その日の生活にも困ることがあつた。

このような生活環境の急変からくる、さまざまの苦しい体験が、自尊心の強い、そして多感な少年期の彼魯迅に与えた影響は、どのようなものであつたかは、容易に想像されるし、又、彼の作品を通してうかがうことができる。今はすっかり没落した家でありながらも、彼は好學心を抑えることができず、又、自分の置かれた環境から脱れるために、母に無理を言い、終に母を口説き落して、一八九八年、十八歳で南京の江南水師学堂に入学したが、その間のことを彼自身、その第一作品集「呐喊」の「自序」の中に、次の如く述べている。

「……かなりの暮らし向きから、急にどん底生活に陥つた人があるとするれば、その人はきつとその過程で世間の人々のいつわら

ぬ姿を見るだろうと私は思う。私がNへ行つてK学堂に入らうと決心したのも、異なる道を行き、異なる土地へ逃れて、別種の人々と交りたいと考えたかららしい。母は、しようことなしに、八田の旅費を工面してくれて、私の好きなようにせよと言つた。だが母は、泣いた。これは人情として、当然であつた。何故なら、その頃は経書を学んで官吏の試験を受けるのが正当なコースであり、洋学を勉強するのは、世間の眼からすると、行き場所のなくなつた人間がついに魂を毛唐に売り渡したものと見られていて、それだけよけいにはずかしめられ、いやしめられるからであり、のみならず、母は、自分の息子に会えなくなるからであつた。……」

このようにして入学した江南水師学堂から、翌年、陸師学堂附設の路礦学堂に移り、ここに三年間在学して、一九〇一年、二十一歳の時卒業した。この水師学堂から陸師学堂附設の路礦学堂への転校の理由については、彼の自伝的な作品を見ても、このことにふれていないのでよくわからないし、又、このことは別にさほど重要なことでもないと言えよう。たゞ彼が南京に出て、官費の学校を選んだのは、没落した家のことを考えたからであり、水師学堂や、陸師学堂附設の路礦学堂を選んだことは、決して将来軍人になりたいとか、或は採礦技師にならうという切実な希望とか、野心とかがあつたわけではなく、新しい学問、洋学への抑えがたい憧憬欲求からである。それだけに、彼が路礦学堂を卒業して、その翌年即ち一九〇二年、省の留學生の試験に合格して、日本に渡り、医学を修めるために、今まで学んだ採礦を捨てることに、何の未練も躊躇も感じなかつたことは、充分うなずけるこ

とである。

かくして彼は渡日して先づ、当時中国の留學生の多くがそうしたように、予備校に入学して日本語を学び、そこにどの位在学したか明らかではないが、やがて一九〇四年の八月、仙台の医学専門学校に入学した。前述の如く南京の水師学堂、陸師学堂附設の路礦学堂入学は、当時の好學心を満すためのもので、はつきりした強い志望から来るものではなかつたが、この場合は、はつきり医学志望という目的を自覚するまでに、今や彼は年齢的にも、思想的にもすでに成長していたことを示すものである。

魯迅をして医学を選ばしめたものは、何であろうか。そしてその医学を修めるのに、わざわざ東京から遙か北の仙台を選んだのは、何故か。

三

魯迅が医学を志望したことについては、彼の少年時代、家運の傾きかけた家の中で、えたいの知れない病氣にとりつかれ、病死した父親の診療にあつた旧式の漢方医の、あやしげな漢方薬の処方、余りにも非科学的であり、しかもそれが高価なるために、飲むことを拒む父親を見つめているうちに、彼の少年らしい胸の中に、限らない不信と憤怒の心が溢れ、その頃から父のような不幸な人を救うべく、医学志望がすでに芽生えていたと言えよう。

すでに述べたように、魯迅の生れた家は、祖父が或る事件に連坐して、下獄したのを機に、忽ち家運が傾き、しかも彼の父がはつ

きりしない病氣のために、苦しみながら、やがて死んで行くといつた不幸が次々に彼の身辺を襲い、多感な少年の心に非常に大きな打撃を与えたことは、想像に難くない。

一九二五年に、「阿Q正伝」のロシア訳の序文に附加して、外国の読者に簡単な閲歴を知らせるために書かれた、「自伝」の中に、彼は次の如く書いてある。

「……私が十三歳になつた時、私の家は忽ちにして一場の非常に大きな變動に遇い、ほとんど何もかもなくなつてしまつた。私はある親類の家にあづけられたが、時には乞食と云はれた。私はそれで決心して歸つた。だが私の父は重病にかゝつた。およそ三年以上も患つて死んだ。……」

又、前述の「呐喊」の「自序」には、その頃の家況の悲惨と、父の病氣について、次のように書いてある。

「……私は、かつて四年余りの間、しよつちゆう——殆んど毎日、質屋と薬屋に通つた。年齢は忘れてしまつたが、とにかく薬屋の帳場が私の背丈ほどあり、質屋のそれは背丈の倍ほどあつた。私は、背丈の倍ほどある帳場の外から、着物や髪かざりなどを差出し、さげすみの中で金を受け取り、それから背丈ほどの帳場へ行つて、長患いの父のために薬を買つた。家に帰れば歸るで、また仕事が出た。かゝりつけの医者がよく有名な人だつたので、その処方箋（補助薬）も変つていたからである。冬の蘆の根、三年霜にあたつた甘蔗、元のつがいのまゝの蟋蟀、実のなつた平地木（小灌木の一種）……手に入りがたい代物ばかりである。それほどにしても父は、病が日ましに重くなり、とうと

う死んでしまつた。……」

貧困と父の病氣のために、少年の魯迅が毎日質屋と薬屋を往復し、しかもさげすみの白眼を背に感じたこの屈辱感、恐らく魯迅の心の中に根強く植えつけられ、彼の一生を支配した。魯迅の父は、所謂読書人ではあつたが、病弱のせいであるうか、世の読書人のすすむ官途につくこともせず、かと言つて理財の道を選ぶこともしなかつた。子である魯迅が、後述する「朝華夕拾」などの作品の中に描いている父は、冷酷なほど嫉に敵しい、家庭内では専制的な暴君としての典型的な父親であつた。そのように父親を描いている彼は、父をにくむとか、うらむとかの感情はみじんもなく、父親の自分に対する愛情を、胸いっぱいになつかしんでいる。

この父の病氣を診ていた医者は、「わしがこれほど薬を用いて、さして験が見えぬとあらば」（「朝華夕拾」の「父の病氣」と、最後には巫術を治療にとり入れようとした。

それについては、一九二六年に制作された、彼の幼年時代から辛亥革命までの、時代順を追つた十篇から成る、自伝的回想記とも言うべき、「朝華夕拾」の中の「父の病氣」という思い出の作品の中に書かれているが、その医者は、

「どうじやな、一度人にお見せになつて、業か何か、とくと確かめておもらいなされては……、医は能く病を医やすも、命を医やす能わず、な、そうじやろ。もとより、前の世の因縁というところもあるゆえ……」

などと言ひ出し、そして更に、「舌は心の靈苗なり」というか

ら、その舌の上に丹をのせて、心の悪魔を退治することをすゝめたが、魯迅の父は、首を横にふつて、之を拒み、遂にこの作品の中で、幾分揶揄的な表現法で、「名医」と呼んでいるこの先生にも見放されて、魯迅が同じ屋敷内に住む衍夫人と言われて、「お父さん！お父さん」と呼ぶ声を聞きながら、三十七歳の生涯を終つたのである。作品「父の病氣」の終りに

「私は今でもまだ、あのときの自分の声が耳に残っている。それを思い出すたびに、これこそ父に対する私の最大の過ちだったような気がする」

と結んでいるのは、不如意な生活の故に、あやしげな漢方医の処方による、しかも高価な薬引を拒みつゝ、淋しく死んで行つた父に対して、子として相済まないという氣持と、その行間に「名医」の非科学的な治療法に対する、限りなき不信と憤懣が、ひそんでいると見られないだろうか。

この父の病氣と死、そしてこれから受けた魯迅の傷心と、治療にあつた「名医」の非科学的な態度は、自から医療に対する彼の関心を深くさせ、やがて父の没後、彼が南京に出て新しい學問、洋学を学び、進化論など自然科学的知識への驚異と憧憬を感じ、更に生理、衛生に関する医学的知識を次第にひろめて行くことになつた。そして遂には「名医」の非科学的な医療に対する不信となり、彼の医学志望の芽生えとなつた。この間のことは、「呐喊」の「自序」には次のように述べられている。

「とうとうNへ行つてK学堂に入學した。この学校で私ははじめて、世には物理や、数学や、地理や、歴史や、図画や、体操な

どの學問があることを知つた。生物学は習わなかつたが、私たちは本版本の「全体新論」や「化学衛生論」などを目にする事ができた。私はいまでも覚えてゐる。以前の医者や理窟や処方、いま知つたこととくらべてみて、次第に私は、漢方医は結局意識的、或は無意識的な騙りに過ぎない、ということをとるようになったのである。そして同時に、騙られた病人と、その家族になつたのである。そして同時に、騙られた病人と、その家族になつたのである。そして又、翻譯された歴史書によつて、日本の維新が大半、西洋医学に端を發しているという事実をも知るようになったのである。

これらの幼稚な知識のお蔭で、のちに私の學籍は、日本のある田舎町の醫學専門學校に置かれることになつた。私の夢はゆたかであつた。卒業して國に歸つたら、私の父のように誤られている病人の苦しみを救つてやろう。戦争のときは軍医を志願しよう。そしてかたわら、國民の維新への信仰を促進させよう。」

父の棄代のために、あやしげな処方、しかも高価な薬引をさがしてもとめるために、不運なそして貧乏な家の長男として、少年魯迅は、耐え難い屈辱と労苦を甘受したのに、父は死んでしまつた。父の生命は結局、無知な医者のために騙られたのだと考え、そして騙られる病人と、その家族への同情となつた。このような自己の不幸を、他人の不幸におき換え、或は發展させて考え、自己の境遇を、他人の境遇にと、このように一般的な、或は社会的な問題にまで、押し広げて考えることによつて、國家民族を救い、立て直す道に自らを投げ込もうとすること、そのようなヒューマニズムが、魯迅の一生を貫いている。彼は心から中國と中國人を

愛した。そしてそれは世の常の偏狭な国家主義者ではなく、中国と中国人を愛することの異常に強かつたということで、多分に人間的なもので、民族的ヒューマニズムとでも言えるものである。

このように彼は立派な医者になることによつて、不幸な同胞を救おうと考えるに至つたが、その夢はまたもつと大きな夢にも通じていた。それは彼が書いてるように「維新」にも通じるものだと思つたからである。当時の目醒めた進歩的な青少年ならば、誰もが考えたことではあるが、屢々外国から圧迫されつゞけて、衰弱の極にあつた中国を何とかして救い、建て直さねばならないという、愛国的な熱望を満足させるものであつたからである。隣国の小国日本が、日々隆盛になりつゝあるのを見るにつけても、それは明治維新の断行によるものであり、その維新は又、多く蘭学に端を発する科学的知識の、採り入れに關係するものだと考えたのである。

永い間の因習に縛られて、旧態依然たる中国は、今こそ科学的知識を吸収採用することによつて、救われねばならないが、それにつながるより實際的な人間生活、生命にかゝつる医学と医術の面から啓蒙し、次第に救国への革命を予定するという夢を描いたのである。それ故にこそ、「私の夢はゆたかだつた」と述べている、この言葉が、我々の心の中に、ほのぼのとした共感を感じさせるのである。

このような人道主義的な夢をもつて、彼は医学を志望したが、それは決して単なる思いつきからではなく、よくよく考えた末の決心であつた。南京で彼が受けた教育は、所謂、富国強兵の実学

であつたし、時代的な環境も亦実学的であつた。没落した家の当主としての責任と自覚と、国の前途を憂うる官費留學生の民族意識の下に、學問を志すには、有用な學問を選ばなければならぬ必然さが、彼にあつたのである。そのようなぎりぎりの必然さの中で、選んだ医学であつたにも拘らず、それを捨て、文学に転向したのは何故であらうか。

四

魯迅が一九〇四年の八月、心に青年らしい大きな夢をいだきながら、遠く北の仙台の医学専門学校に入学したことは、既に述べた通りである。仙台に於ける學生生活については、既述の「朝華夕拾」の中に収録され、吾々日本人にも親しく愛読されている「藤野先生」という好短篇を通して、そしてより重要な事柄であるところの、彼が医学を放棄して、仙台から東京に帰り、文学を選ぶに至つたことを、「藤野先生」及び「呐喊」の「自序」を通じて考察して見たい。

仙台では「物は稀なるをもつて貴しとするのであらうか」、異国人ということ、学校の職員からは、「食事や住居の世話までしてくれ」る「優待を受けた」。殊に魯迅の生涯の感激的な追憶となり、又或る場合には彼にとつて鼓舞激励の力となつた、解剖學担当の藤野巖九郎先生の彼にそゝがれた温情こそ、彼をしてこの「藤野先生」を書かせ、そして終生その恩義に感激したことを卒直に告白しているのである。

彼の筆によれば、藤野先生は「色の黒い、瘦せた先生であつ

た。八字ひげを生やし、眼鏡をかけ、……抑揚のひどい口調で講義をした。又、先生は「服の着方が無頓着である。時にはネクタイすら忘れることがある。冬は古外套一枚でふるえている。一度など、汽車の中で、車掌がてつきりスリと勘ちがいで、車内の旅客に用心をうながしたこともある。」と先輩が新入生に紹介した程の人であり、いかにも、或る時代のものに拘泥しない、学問の虫とでもいう学者を彷彿とさせる。その先生が特別に、唯一人の異国人である魯迅を親切に指導した。即ち講義が始まつて一週間すぎて、助手に命じて魯迅を研究室に呼ばせた。その時の様子を

『研究室へ行つて見ると……私の講義は、筆記できますかと彼は尋ねた。「少しできません」「持つて来て見せなさい」私は筆記したノートを差出した。彼は受け取つて、一、二日してから返してくれた。』

と述べている。それには一々朱筆で訂正してあり、これから毎週一回提出するようにと言つた。その時の感動を魯迅は次の如く書いている。

「持ち帰つて開いて見たとき、私はびつくりした。そして同時に、ある種の不安と感激とに襲われた。私のノートは、はじめから終りまで、全部朱筆で添削してあつた。多くの抜けた箇所が書き加えてあるばかりでなく、文法の誤りまで、一々訂正してあるのだ。かくて、それは彼の担任の学課、骨学、血管学、神経学が終るまで、ずつとつゞけてくれた。」

藤野先生が、このように魯迅を親切に指導しているのを見た同

級生の中の或る者は、魯迅が学年末の試験に、平均六十五点以上をとり、級の中位を占めたのは、藤野先生が彼に問題を漏洩したのだろうと、疑うに至つた。そのために同級の学生会の幹事が、魯迅のノートを検査したり、又「汝い悔い改めよ」という、新約聖書の言葉にはじまる、匿名の手紙を寄せたりした。しかしそれもやがて一部学生の誤解であることが分つたが、それほど藤野先生は、親身になつて魯迅を指導したのである。

しかしこのような侮辱をうけてから、彼は学校を面白く思わないうな事件に出会つて、第二年目には遂に医学をすて、この仙台の地を去らなければならなくなつた。その決意を藤野先生に告白したとき、「彼の顔には、悲哀の色がうかんだように見えた。何か言いたそうであつたが、ついに何も言い出さなかつた。」と述べているが、魯迅の決意が固く、先生はとも自分の力では、翻意させることのむづかしいのを知つて、「何も言い出さなかつた」のであろう。

そこで、仙台「出発の二、三日、彼は私を家に呼んで、写真を一枚くれた。裏には「惜別」と二字書かれていた。そして私の写真もくれるようにと希望した。あいにく私は、そのとき写真をとつたのがなかつた。彼は後日写したら送るように、又、時折便りを書いて、以後の状況を知らせるように、としきりに懇望した。」だがそれ以後、魯迅は「多年写真をうつさなかつた。それに状況も思わしくなく、通知すれば彼を失望させるだけだと思つた。」

と、手紙を書く気にもなれなかつた」から、一通の手紙、一葉の写真すら送らずに杳として消息を絶つたのである。

「だが、何故か知らぬが、私は今でもよく彼のことを思い出す。私が自分の師と仰ぐ人のなかで、彼はもつとも私を感激させ、私を励ましてくれたひとりである」となつかしんだ。藤野先生の彼に対する愛情こそ、中国そのものに対する愛情であり、それ故にこそ彼は感激したのである。更に、「よく私はこう考える。彼の私に対する熱心な希望と、倦まぬ教訓とは、小にしては中国のためであり、中国に新しい医学の生れることを希望することである。大にしては学術のためであり、新しい医学の中国に伝わることを希望することである。彼の性格は、私の眼中において、また心裡において、偉大である。彼の姓名を知る人は少いかも知れぬが。」と述べているのを見ると、藤野先生の国境を越えた愛情は、その後も永く魯迅の心の中に生きて、彼の後半生の決して坦々とは言えなかつた時代を通じて、終始彼を鼓舞し、彼に勇気を奮い起させる力となつたことは疑を容れない。

藤野先生に手を入れてもらつたノートは、永久の記念として、三冊の厚い本に装釘して、大切にしまつておいたが、引越しのときに、他の一部の書籍とともに、失つたことを残念がつて記し、最後に次のように述べて、作品「藤野先生」を結んでいる。

「たゞ彼の写真だけは、今なお北京のわが寓居の東の壁に、机に面してかけてある。夜ごと、仕事に倦んでなまけたくなるとき、仰いで灯火のなかに、彼の黒い、瘦せた、今にも抑揚のひどい口調で語り出しそうな顔を眺めやると、たちまちまた私は良心

を発し、かの勇気を加えられる。そこでタバコに一本火をつけ、再び「正人君子」の連中に深く憎まれる文字を書きつゞけるのである。」

追憶というものは、いつも美しいというが、藤野先生の学者らしい真摯にして誠実な人格、そして先生の魯迅に対する滾滾と湧き出るような愛情が、永く魯迅をとらえていたのである。魯迅にとつて仙台の地は、必ずしも楽しい思い出の地ではなく、むしろある意味では苦痛の地であつたとも言えよう。しかし藤野先生に接したこと、そしてその先生からあのように可愛がられたことは、魯迅にとつて終生忘れ得ない思い出として、彼自身折にふれてなつかしんで居り、彼の人間形成の上に多大の影響を与えていることは否めないであろう。

この「藤野先生」を含めて、「朝華夕拾」の各篇が制作された頃、即ち一九二六年という年は、魯迅がその生涯を通じて、生活上に異常な不安定と圧迫とを感受した時期であつた。所謂「三、一八事件」によつて、時の北京軍閥政府から逮捕命令が出され、彼は居所を転々とし、遂に同年八月に十五年も住み慣れた北京を棄て、友人の林語堂を頼つて厦門に赴いたが、その厦門の地も彼にとつては安住の地ではなく、せつかく古代史の研究に没頭せんとしたのに、厦門大学当局の不誠意に堪えられず、僅か半年足らずにして、迎えられるまゝに、一九二七年一月、広東の中山大学に赴任した。

このような不安と焦慮の厦門時代に、「藤野先生」が書かれたことは、藤野先生を追憶することによつて、きびしい現実生活が

どれだけ力づけられたことであつたらう、かということ物語るものである。

五

以上述べ来たように、魯迅にとつてはよくよく考えた末に、選んだ医学であつたのに、又、藤野先生のような、あたゝかい愛情をそいでくれた人に出会つたのに、医学をすて、仙台の地を去つたのは何故だろうか。その間の事情については、「呐喊」の「自序」と、「朝華夕拾」の「藤野先生」の中に、同じように書かれている。先ず「呐喊」の「自序」には、

「私は、微生物を教える方法が、いまどんなに進歩したか、知るべくもないが、ともかくその頃は、幻灯をつかつて、微生物の形態を映してみせた。そこで、講義がいくぎりして、まだ時間にならないときなどには、教師は風景やニュースの画片を映して学生に見せ、それで余つた時間をうめることもあつた。時あたかも日露戦争の際なので、当然、戦争に関する画片が比較的多かつた。私はこの教室の中で、いつも同級生たちの拍手と喝采とに調子を合わせなければならなかつた。」と、当時の講義形態にふれ、この幻灯の中で、彼は彼がこれまで抱いていた夢を根底からくつがえされ、彼のその後の生涯的な方向を決定させるに至つた場面に会つたのである。そのことについて、「自序」では次のようにつづけている。

「或る時、私は突然画面の中で、多くの中国人と絶えて久しい面会をした。一人がまん中にしばられて居り、そのまわりに多勢

立つている。どれも屈強な体格だが、表情は薄ぼんやりしている。説明によれば、しばられているのはロシア軍のスパイを働いた奴で、見せしめのために日本軍の手で首を斬られようとしているところであり、取りかこんでいるのは、その見せしめのお祭りさわぎを見物に来た連中とのことであつた。」

彼はこのみじめな同胞の姿に打たれて、医学によつて同胞を救う、という夢から完全に醒めた。そして医学よりも以前の重要な問題があることを知つた。即ち同胞の肉体より精神の貧困を救う方が、大切だと悟つたのである。そのことを「自序」では更につづけて次のように述べている。

「この学年がおわらぬうちに、私は東京へ出てしまつた。あのことがあつて以来、私は、医学など少しも大切なことでない、と考えるようになった。愚弱な国民は、たとい体格がどんなに健全で、どんなに長生きしようとも、せいぜい無意味な見せしめの材料と、その見物人になるだけではないか。病氣したり死んだりする人間がたとい多かるうと、そんなことは不幸とまではいえぬのだ。されば、われわれの最初になすべき任務は、彼らの精神を改造するにある。そして、精神の改造に役立つものといへば、当時の私の考えではむろん文芸が第一だつた。そこで文芸運動を提唱する氣になつた。」

その幻灯事件を契機として、医学を断念した経緯を、一方「朝華夕拾」の「藤野先生」では

「……だが私は、つづいて中国人の銃殺を參觀する運命にめぐりあつた。第二学年では細菌学の授業が加わり、細菌の形態は、

すべて幻燈で見せることになつていた。一段落すんで、まだ放課の時間にならぬときは、時事の画片を映してみせた。むろん、日本がロシアと戦つて勝つてゐる場面ばかりであつた。ところが、ひよつこり、中国人がその中にまじつて現われた。ロシア軍のスパイを働いたかどで、日本人に捕えられて銃殺される場面であつた。取囲んで見物している群集も中国人であり、教室のなかには、まだひとり、私もいた。

「万歳！」彼らは、みな手を拍つて歓声をあげた。この歓声は、いつも一枚映すたびにあがつたものだつたが、私にとつては、このときの歓声は、特別に耳を刺した。その後、中国へ帰つてからも、犯人の銃殺をのんきに見物している人々を見たが、彼らはきまつて、酒に酔つたように喝采する——ああ、もはや言うべき言葉はない。だが、このとき、この場所において、私の考えは變つたのだ。第二学年の終りに、私は藤野先生を訪ねて、医学の勉強をやめたいこと、そしてこの仙台を去るつもりであることを告げた。彼の顔には、悲哀の色がうかんだように見えた。何か言いたそうであつたが、ついに何も言い出さなかつた。」

と敘述しており、「呐喊」の「自序」の敘述と、ほぼ同じである。「朝華夕拾」の「小引」の中で、魯迅は、「この十篇は、記憶の中から抜き出したものであり、實際の姿とはちがうかもしれぬが、ともかく今日私の記憶ではこうなつてゐる」と書いてゐるが、二十年という歳月を経たことではあるが、魯迅にとつて重要な転機となつた事があるだけに、彼の心の中に深くきざみ込まれていることであつて、この二篇の敘述は、大体事実在即し

たものと見ていいだろう。

しかし、この幻燈の中で前述のような場面によつかつて、突然医学から文学への転向をその瞬間に決心したのであるか。この幻燈から受けた打撃が、決心への直接の動機となつたとしても、それまでに彼の考えの中には、次第に文学への傾向が芽生え、動いていたにちがいない。彼の友人許寿裳の編した魯迅の年譜によると、彼が仙台へ行く前、即ち日本に留学した当初の頃、「餘暇に哲学書と文芸書をよく読み、人性と国民性の問題に関心をもつ」とあることによつて、そのことがうかがえる。彼の志した文学は、彼自身が言つてゐるように、「精神を改造する」ための文学、言いかえるならば啓蒙のための文学である。この彼が志した文学については、後日稿を新にして考察して見たい。(一九五六・一〇)